

# 眞生

第十卷 第九號

□近頃の國情はすべてを擧げて鬭争の状態である。國と國と、人と人と、殆ど一切が戦いの有様である。弱肉強食、生存競争と云ふことは昔からよく聞くところであるが、今日ほどそれが露骨に現はれたときはない。

□之を一國の上に見るも、資本家と資本家とが互に雌雄を争つて居り、資本家と労働者とが争議を重ね、地主と小作人とが争いを止めない。

□思想の上にも階級の意識が濃厚となり、政治の上にも階級の闘いが主となつた。政黨と政黨との戦い、有産と無産の争い、一として生存競争、弱肉強食の戦いでないものはない。

□鬭より鬭へ、殆ど一切が鬭によつて、自己の生命を維持するの有様である。鬭いなきものは亡ぶと云ふのが今日の有様である。而も其の鬭争の根源を尋ねれば一として經濟關係でないものはない。

□經濟の利害さへ一致すれば昨日の仇敵も今日の味方となり、經濟の利害さへ反すれば昨日の味方も今日の敵となる。人間の鬭争は今や全く經濟が中心であるかのやうである。

□乍然、人生の理想は經濟ではない。經濟は人類生活の一資糧に過ぎない。生きる爲めの經濟が今や反つて多くの人をそれによつて殺してゐる、而も本當の經濟は共同一致してこそ生ずるではないか。

□そこには労働者も資本家も地主も小作も大いに反省すべきであらう。國と國との間にも、人と人との間にも、戦いは必ずしも最後の勝利ではない。(念)

目 次

中身がない	越 子
新しき宗教の内容	土屋観道
祖國を顧みて	田中行雄
南支の旅	土屋観道
桑原省三氏を吊ふ	大垣光明 眞生會
道友に告ぐ	土屋観道
吾朋便り	

□今日の私は念佛の中に佛を見ると云ふよりも、寧ろ佛の慈光の中に自分の爲すべき仕事に急がしいと云ふのが本當である。

□此の意味から云へば昔の私の信仰は丸で小供の信仰にすぎなかつた。或は赤子の生活と云つてもよい。乍然今日の私は今やそれではあきたらぬ。

□同じ佛に南無するにも、その人の南無する心の持ち方が即ちその人の信仰を限定する。従つて理想の底い人の信仰はそれだけ其の人の信仰も底いわけである。

□乍然生ける信仰は成長する。従つて昨日の信仰が必ずしも今日の信仰ではない。日に新に日々に新に進展して止まないのが如來の御光に照されるものゝ信仰である。

□赤子も三年立てば三つになる。入信以來二十有五年かたわのやうな私の信仰もどうやら獨りで立てさうだ。如來の子として、如來の心に幾分かそいたい心である。

□人生僅か五十年、之を人生の一期とするならば私の餘すところは幾何もない。五十、六十になつても、尙人生の行く先きを知らない多くの入々には一體何を爲さうとするのであらうか。

□すべてを金錢によつてのみ換算する人は人間の成功をも金の持ち高で定めやうとする。乍然金の有高が人格の標準ではない。

□釋尊や孔子やクリストの生活を見るがよい。金錢の外に永遠の生命と無限の向上とが輝いてゐるではないか。「人はパンのみにて生るものにあらず」と云つたクリストは確に宗教的偉人である。(念)

宇宙には、「大御心」とも謂ふべき、「み心」が満ち充ちてゐます。

「如來のみ心」とも名づくべき、「み心」が充ち満ちてゐます。

ソレヲ、「宇宙の意志」とでも云ひませうか、「天地の生命」とでも云ひませうか、兎に角我々總てのものを、正しく眞直ぐに、活かしてやらうとしてゐる下さる「み心」があるように感ぜられます。

そして心して觀ると、花一本でも其の「宇宙の聲」を聞いて咲いてゐるようでありませう。又鳥一羽でも、水の流れ一つでも、その「心」を聞いて流れ／＼飛び飛んでゐるようであります。

人間でも、その「大宇宙の心」を聞いて、動いてゐるやうな人は、どこともなう確りしてゐる。物を言つても仕事をやつても、やり方が違ふ。如何にも自信のある、動ぜナイ、確りしたやり方を、して行かれます。

それを思ふと信仰といふことは、衷心がら此の宇宙の心を開き、其の力から活かされて行くことであると思ひます。

それが仲々、我々のやつてゐることは、皆空ツボな事が多い。

學問をしても、勤めをやつても、施しをやつても、商賣をやつても、何をやつても皆「上べ」ばかりで「中身」がない。狐の嫁入りのように表面ばかりは飾り立て、派手にやつてゐるが、心からどれ丈けやる氣でやつてゐるでせう。皆いゝ加減な其場濁し、其場様ぎにすぎませぬ。

そんな事では、どれだけ儲けても、どれだけ損したつて大した事はありません。「人生全體」が失敗です。大體「生きる」氣で生きてゐるやしません。「活かされる力」に生きてゐるやしません。

今の飯喰つてゐる事も、今の雪糰へ這入つてゐる事も、今の事務執つてゐる事も、皆、一々が、此活かされてゐる營みの一つとして、本氣にナツテやつて行きたい。そこに總ての仕事振りが變つて來ます。生活の仕方が更つて來ます。

それでこそ新しい家庭が生れて來ます。新しい國家社會が出て來ます。此の根本から生れ更つて來たものでなくては本當でありませぬ。(越子)

それでこそ新しい家庭が生れて來ます。新しい國家社會が出て來ます。此の根本から生れ更つて來たものでなくては本當でありませぬ。(越子)

# 新しき宗教の内容

土屋 觀道

## 一、宗教内容の變遷

- 宗教の本質が變遷するかどうかは暫く別として、いかなる宗教も時代と共に其の内容に幾分の變化なきものはない。而も其の内容の變化に就いては殆どすべて云つてよいほどに、新たな宗教は從來の宗教に對して、新たな民衆の味方である。
- だから若し、進歩と云ふことが其の時代の民衆の生活に適するものと云ふならば新しき宗教は舊き宗教に比して確に一步を進めた點があると云つても差支えない。
- そしてまた、同じ宗教と云はれるものも、其の宗教が永く民衆に用ゐられる限り、永い間には其の信仰の内容に可なりの變遷を來たすことが往々にある。而もそれは社會の組織が革まり、社會の思想と生活とが異なるにつれて、その宗義の變革も亦甚しい。
- 従つて、多くの場合、舊き宗教、死せる宗教と云ふものは要するに時代と共に時代に生きることのできないものが、早く此の世を去るかに見える。して見ると宗教も亦そこに生存競争があり、生者適存の法則を離れることのできないものか、大いに反省すべきものがある。
- 之は一面から云へば宗教が此の社會に寄生するものであつて、人類を指導することのできないもの

かのやうに誤まれる點も無いではないが、乍然いかに宗教が高尙なものであり、又いかに外から見進んだ宗教であると見られても、實際の宗教は實際の人類に効驗なくしては宗教としての眞價値はない。

- 従つてまた多くの民衆も自分の生活に價値を持たないものならばいつしか自分の心から其の宗教を棄て、いつしかそれを忘れて遂に顧みないものとなる。そこに多くの宗教が舊きものとして亡んで行く。而て宗教の衰退も亦そこにある。
- 民衆の要求は食なくして生きられない動物の如く宗教なくしては生きられないものである。故に、そこに新たな宗教を要求して、それによつて生きやうとするのが民衆である。そこに新たな宗教が時代と共に現はれ、民衆に歓迎を受ける所以である。

## 二、祖師の宗教

- 此の意味に於て、多くの場合、新しき宗教は從來の宗教が現在の民衆を救ふことのできないところに起つて居る。従つて多くの宗教は少くも從來の既成宗教であきたらず、更らに新たな要求をそれによつて充たさんとして現はれて來たのである、凡そ一宗の祖師たるものは此の意味に於て一宗の改革者でないものはない。
- 此の意味に於て、祖師の心には自ら信する宗教を以つて從來の宗教より一段と進んだものだとの確信のないものもない。之多くの場合、一宗の祖師たちが自らの宗教を無限の確信を以つて多くの人に宣傳して止まない所以である。
- 彼の獨逸のヘーゲルは物の進歩に正反合の辯證法を用いてゐるが凡そ宗教の進歩にも此の正反合の進歩の階程をとるかと思ふ。

と。乍然それは云ふ人の誤りである。何となれば眞實の宗教はやはり既成教團の中から發生し成長し、自然に分列するからである。

□それは釋尊にしても、キリストにしてもさうではなかつたか。その他佛教に於ける祖師たちも一としてさうでなかつた人たちはない。従つて本當の宗教はやはり既成教團の中から出ると云ふのが本當である。現に淨土宗の中からも、從來の教へを破つて、共生會、光明會、眞生會等の出でつゝあるのは此の實例である。

□要はたゞいかなる宗教が現代を眞に救ふかと云ふ問題であつて、新舊の争いや、宗旨の争いでは斷してない。

□それは恰も現代は正に平安の末期から、鎌倉の初めに於ける變革の如き、新たな宗教の正に續出すべき秋かと思ふ。而して當時の舊き宗教は天臺、眞言の祈禱佛教であつたが、之等を捨て、之等の中から新に生れたのが淨土、眞宗、禪、日蓮等の宗教であつた。天臺、眞言にも時代に適應すべく新たな解釋を試みた人も起つたが、それ等は今や問題ではなくなつた。

□然らば平安より鎌倉に到る政變のそれにも増して、更に重大なる社會の變革を受けたる明治維新の後、更にまたそれにもましたる社會××の氣運に際會せる今日、あらゆる民衆は今尙封建以前の思想と信仰に堅められたる舊い宗教に寄らねばならぬか。之はまた、あまりにも識者をまたねば判らぬものでもあるまい。

## 七、釋尊の宗教

□此の意味からすれば現代の宗教は寧ろ釋尊の宗教に歸れと云いたい。何となれば今日の既成宗教よりも寧ろ釋尊當時の宗教が反つて現代を改造し指導するに重要なものがあるからである。

□釋尊の宗教は現實を離れての宗教ではなかつた。従つて、當時の印度思想の革命者として、徒に天上に拜むの梵天を地上に引き下ろし、自ら天地の大道に活歩して佛陀の生活を要望し、一切の空想を根絶して、如實に人類の生活を肯定したのが釋尊の宗教であつた。

□佛陀の生活とは即ち人としての理想、佛としての生活を人類の上に肯定した生活である。四民は平等であり、上下は一致し相互に扶けて、鬭争なき、平和の生活であつた。上は王侯より下萬民に至るまで眞生の道を中心とするの生活である。

□従つて經濟の問題も無私、無所有の中に、共存共榮の生活の實現であつたからである。此の意味に於て、現代の佛教が釋尊に歸れと云はれることも亦決して一理なきことではない。

(一九三二、七、五。——再校八、三一)

## 祖國を顧みて

田 中 行 雄

### 南無阿彌陀佛

炎熱の支那旅行を終へられ御無事御歸國の御便り嬉しく拜誦申上候、私も亦八月三日里郷を發ち大和法隆寺内に五日起臥し朝四時頃から勤行寫經などし午前の四時間聖徳太子を中心として信仰のこと經文の思想哲學などをから太子當時の政治上美術上のことなど參聽仕候。

午後は諸講師に率ゐられ佛像や建築の實地見學となし候。

當時の思想上政治上の混亂は現代にも勝るものあるを知り、太子の聰明はよく之を整へ日本國民の向ふべき永遠不動の基礎を築つかれ候に對し大いなる感激を覺え候。

わけでも法華の義疏をものさるるに際し、時に支那の權威ある釋義を捨て、極めて大乗的に實際的佛教に讀み改められ候卓見には敬歎の外なく候ひき。當時疎昧とも云ふべき日本人が文華燦然たる先進國支那碩學の書を最も正大に讀みかへられ候聰明と識見に今更各大學に跋扈

□此の意味に於て、宗教の價値は甲の國と乙の國と同様にはできぬ場合がある。それは恰も同じ道徳も其の國の事狀、その他の關係に於て、必ずしも同様に行かないと同じである。此の點、宗教の理想と實際とが大いに異なる所以である。従つて昔に適した宗教必ずしも今日に適した宗教とは云へぬ場合もある。

□従つて、昔に於ける宗教が今日も尙民衆の宗教でありうるかは更に深き反省を要する。殊に、昔の宗教が、今日の社會を指導するに足るものか、従つて現代の要求する眞の宗教として、其の指導原理を有するかは新しき民衆の生活と共に私共の考究を要する所であらう。

### 五、從來の宗教

□こゝに從來の宗教と云ふ、それは已に多くの社會に行はれつゝある所謂既成の宗教を云ふ。従つてそれらの中にはキリスト教も佛教も、其の他神道、マホメット等の宗教をも含んでゐる。

□然るに是等の宗教はその昔、いづれの時代に起り、いかなる事情のもとに發達して來たものか、その思想と信仰と時代制度との關係はさうであつたか、是等は深く識者の反省すべき事柄である。

□かく云へば或る人は言ふかも知れぬ、凡そ佛教にせよ、基督教にせよ、はたまた回教にしても、已に何千年來あらゆる民族の中に生長し發展して、幾多の民族を感化し指導し來たではないか、従つて今後來るべき民族に對しても同じく此の態度を以つて之を感化し、指導して行けばよいと。

□乍然それにしてはいかに佛教と雖も昔のまゝではあり得なかつた。名前こそ應病與藥とは言ふが、それだけ民衆の生活に即して其の教を民衆化せなければならなかつたことを知るべきである。従つてまた、そこに初めて宗教の効果もあり、又そこに新たなる宗旨や宗派も出來なければならなかつた所

以をも忘れてはならない。

□此の意味に於て、從來の宗教は主として封建以前の宗教であり、その時代以前に出來た宗教である。而も其の中に發生し、生長し、分派して來た宗教である。従つて、其の宗教の儀式も内容も主として封建以前の社會に適すべく組織せられた宗教であると云つても過言でない。

□従つて、今日の民衆が從來の既成宗教を歡迎しない理由もそこにある。何となればいかに努力して其の宗を説くと、從來の宗教では其の思想信仰の内容が封建時代の民衆には適しても封建ならざる今日の社會生活には到底適しないからである。

□此の事は一見宗教とさへ云へば千古萬古變りなきものゝ如く考へてゐる人の到底知りうべきことではないが、乍然あらゆる時代に、社會組織の變革と共に新しき宗教の何故にぞく出したかと云ふことを歴史の上に反省すれば容易く判ることがらである。而てまた、之私が從來の宗教に一步を進めて現代に適應する新なる宗教を要望する所以である。

□現代は非常なる進歩のもとに、あらゆる科學も哲學も變つて來た。そしてまた、殆どすべてが社會組織の變革の上に封建思想が倒れ、資本主義組織も行き詰つて居る。而もその間の社會の思想、道徳の變化と云ふものは全く此のまゝでは行かない時代である。然らば封建以前の既成宗教で現代人が承知しないのも亦當然ではないか。

### 六、今後 の 宗教

□然らば今後を救ふ新たな宗教はいかなるものか、それは今までの既成宗教から更に一步を進めて、現代を救ふべく、現代に適すべき新なる宗教でなくてはならない。

□かく云へば既成教團の人々は云ふかも知れぬ。汝は已に教團の人でないか、先づ其の教團を脱せよ

□此の事は各宗の教理を成立の年代に排列し、その思想進展の教理を考察するとき、必ずそこには文化史的、若しくは教理史の一つの體系を発見することを得る。

□而もその文化史的発展は其の民族の消張に伴ふものであつて、宗教の消張もそれと道を同する。尤も宗教的社會制度の見方は祖師の時代を最も進んだ時代とし、それより年代を経るに従つて時代も衰へ、宗教も末期に至るやうに考へるのが常であるが。然し、果して史實がさうであるかは充分の批判を待たなければ判らない。

□何となれば我國でも昔は神代から人代になつて來たのであると見て、神代の神々は人代より見て恰も神々の生存し玉ふたやうに考へてゐる。乍然あらゆる文化史の上から眺めて、果して現代人の求むる神の文化であつたかは疑問である。従つてまた、釋尊時代の佛教が果して現代の私共の要求する宗教より更に進んでゐたかも問題である。

□此の意味に於て、多くの宗教は人類の文化と共にやはり新に新に進歩し發展し來たと云ふのが本當の見方かと思ふ。而も此のことは各宗の祖師の宗教を時代的に配列し、文化史的に考究するとき、幾多の實事を其の中に見ることができからである。

### 三、宗教の内容

□然らはその宗教の内容はいかなるものであるか。そこには種々の内容の相違はあるが、要するに、時代の進歩に伴つて、民衆の生活に即して時代の要求を充すべく現はれてゐると云つた方が一番適切である。何となれば時代に適せず、民衆に資益せぬ宗教はたゞそれが現はれても、宗教としての成長もなく、發展を得るの期會もないからである。

□此の意味に於て、一宗の祖師たちは或る意味に於て、全く時代の要求に適應して現はれたものと云

つてもよい。又一面には全く時代要求の反影と云つてもよい。或は又宗教の本質が從來の宗教を打破して新に此の土に復活して來たものであると云つてもよい。

□従つて新しき宗教の内容はいつも從來の宗教に有しない新たな要素を含み、來るべき民衆の新たな望みと喜びと力とを持たないものはない。従つてそこには新たな宗教の革命を意味してゐる。而も此の點が從來の民衆と宗教とから迫害や壓迫を受ける點でもあるが、又新に來るべき民衆の爲めに大いに歓迎せられる所以でもある。

□此の意味に於て、新しき宗教は又新たな民族と共に社會の進歩と相反するものではない。否寧ろ之等の民衆と共にいつも來るべき人類の文化に効驗する。尤も人類の文化にも時には發展の消張もあり、文化の退轉もないとは云へない。それと同じやうに新たな宗教必ずしも前の宗教に勝ると云ふことのできぬ場合もある。

□乍然人類の文化には宗教、哲學、倫理、道德の外に科學藝術等の發展も之を加味しなければならぬ。従つて、新たな宗教がそれらを顧慮しないものでないことはもとよりである。就中、人類の生活が經濟の影響を受け、經濟の關係が社會制度の變革となり、思想信仰の上にも重大なる變化を來す限り、本當の宗教がそれらと無關係であるべきものでもない。

### 四、内容の變遷

□然らば宗教の内容はいかなる具合にその内容を變ずるか、之は私共の一應反省を要するところであらう。何となればいかに高尚なる宗教としても之を信する民衆の程度が底いならば到底その宗教はその民衆の心に入るべくもないからである。そしてその宗教は民衆の中に到底發達することもできないからである。

する拜外奴隷學者の無智とその及ぶ悪感化の大なるを思合はされ候。

太子時代飛鳥の藝術はギリシヤの中世、獨乙のルネッサンス、伊太利の美術などと共に世界最尊至高のものなる由、祖先の天才に敬慕の思ひをはすると共に日本に藝術なしなど、自屈し却つて外國の研究者にその尊貴を指摘さるゝ現代人の自己忘却をも併せ考へ候。

飛鳥もおとさん、ようなる大國隋に「日出づる國の天子、日没する國の王に告ぐ、恙なきや」この國書を致した太子の自立獨往の精神は西に東に事毎に壓迫され陳辯し居る現代日本の外交官を對照せしめ候。

其の後福岡に参り河村先生の座右に侍しこれ悉く明治以來の教育が物質的享樂主義、個人的自由主義に根ざせる害なるを教へられ又御話申上候次第に御座候。

嘗ては藝術の或は宗教の或は機械の特にその中心をなしたる時代あり候ひき。千數百年建立以來滅ぶることなかりし法隆寺の瑩塔伽藍を仰ぐにつけても再び精神が人間生活の王座を占むる日あるを期待仕り候、物質萬能黃金萬能の資本主義、社會民主主義、共產主義も同一噴火山上の舞踏者にてやがて亡ぶるか是正さるべきものと存じ候、金を鼻にかけるも妙に候がマルクス、マルクスといつて引つくりかへる様なさわぎをする求道者も面白く

候。

福岡にては一週間、先生の斯道塾に起臥し午前四時間だけ大學にて公民科の講義を聴き候、曰く思想講習會曰く職業指導講習會等々大學の構内には多數の紳士が集集致居り候ひき、玉樓金殿とも云ひたき建物の壯美と併せて昭代の盛事乍ら一度講義を聴けば例の大教授に候へば一二の例外を除き私共の心を打つもの更になく候、河村先生や友人と御話して講義に幾多の根本的誤謬をも覺らしめられ候、特に悲しく候ひしは時勢の逼促に對する無關心無誠意にて胸の中あらるゝ様に候。

今宵は百道の海岸に縣下各種の盆踊りあればとの友の挨拶に先生は素朴であり眞摯であり悲痛にてもある郷土の藝術がこの生みの親なる田園をはなれて縁りもなき雜踏場に都會享樂兒の見せ物になるを痛まれ候、「支那に凌辱され米國に踏みじられ國が亡びようとするのに踊つてゐる」との御言葉には先生の御悲痛を思ひ参らすと共に若者である吾等の關心が如何ばかり低調墮落せるかを反省せしめられ候、此所博多は丁度六百五十年前蒙古の來襲に際し學國深憂し憤起し猛闘奮戦したる祖國防護の故地に候、松籟いまなほ昔乍ら東の濱邊にある大學の學生は祖國呪咀の聲をあけ西の濱邊にある西南學院の中學生は愛國の純情に血たざらしつゝあり候。奇現象に候か

な。大學の學風に教へられずして中學校の生徒に教へられ候とは。「世界を立派なものにするには日本をよくしなければならぬ、日本をよくするには自分の學校自分のクラスをよくすることだ。」とて先生も生徒も只一つにかたまりお互に勉強し鍛錬致居り候、對立抗争の時代思潮は學校も村も國も全世界を押し流し居り候が社會生活の根本原型たる家の信念原理なくしては一切の努力も徒勞かと存じ候。家の生活は大自然、大宇宙、如來の世界の縮圖と存候が大學に對立抗争の理論行はれ中學校に家の生活實現され居るは世界的奇現象にて如何ばかり日本の教育が上に行く程迷路に入りしかを痛感する次第に御座候。

さるにても西南學院中學生の學校運動こそ頼母しくも嬉しき日本更生の曙光に候。

箱崎神社前に大日本歴史館といふもの出來、われ等命のつながりつながらる祖先の功業に少年時代と同じような心の高鳴りを覺え候。

鹿子木員信先生が其所の趣向に御力つくされ候由先生御自身から信州にて拜承仕候、先生とはゆくりなくも一所に和田時を越し三日間「日本精神發展史上より見たる日本精神」を拜聽仕候、多年歐米の山野を跋涉すると共に歐米精神遍歴の旅の後、振りかへり見る日本精神の莊

嚴偉大に私も亦先生と共に心とどろかし候、己一身を願ると共に祖國をかへりみその混濁を清めると共に一切の長所を遠慮なく伸ばし深の度愈々益々踴躍して参り度候。

南支御旅行後の先生の御胸中には無ぞ漲りあふるゝもの可有之謹而拜聽の期を待上げ候。

又いつもの様に大きなこと申上げ深く愧ち入り候、願くば如來の御光を仰ぎ、直き心明けき心もて進み行き登り歩む様になり度候。

以上暑中休暇中のことあらまし御報申上候、御笑讀下され候はゞ幸甚に御座候。敬白

九月一日

田中行雄

土屋觀道先生侍史

(以上は田中氏より私への私信です、乍然その中には道友と共に大いに味いたものが多いので勝手乍ら紙上に載せさせて頂くことにいたしました。觀道)

x

x

x

x

x

x

# 南支の旅(一)

土屋 觀道

## 一、發端

□永年の間望をかけてゐた支那旅行も久しぶりてその望みを叶えまして、一寸一息きした感じがあります。乍然愈々實行して見ると百聞一見に如かずと云ふが、私の望みがあまりに多方面であつた爲めに、かうして歸京してから考へて見ると、何だかまだ本當の支那を見て來たやうな氣にもなれません。

□之は主として私があれば知りたいた、之も知りたいたと永年の間考へてゐたことがまだ本當に私の見學としてそれが實際の効果を現はしてゐないからであります。乍然、靜に考へれば我國の二三十倍もあらうと云ふ支那の大國、而も有史以來已に四千年になる其の國狀を、たつた二十三日の旅行で知り盡くさうと云ふことはあまりにも大それたことと云はねばなりません。

□それに、二十三日の旅行と申しても、實際に於て、支那の陸地を足で踏んだのは僅に七、八日に過ぎぬのです。いかに商船會社の親切で朝から晩まで自動車で駆け廻つたとしても何で本當の支那が判りませう。若しそれで判

つたと云ふならばそれこそ皮膚のみに過ぎません。

□此の意味に於て、私の支那旅行の如きは全く御話にならないもので、周遊見學などとは全く口にも云へたものではありません。

□それでは行かない方がましであつたかと云はるれば決してさうではありません。單なる私の考へとしてよくこそ行つてよかつたと、今も尙今回の旅行を近來にない快舉として衷心から歡びに充たされて居る次第であります。

□何と云つても異境の國、殊に新興民族として世界の視聽を集めてゐる中華民國の現狀をまのあたり見ると云ふことは今後の世界に對する私共の立場として決して忘るべきことではありません。

□此の意味に於て、十四五年以前に滿鮮地方を二回ばかり廻つた私としては今度の支那内地の旅行ほど私の心を色々の望みに充たさせたものはありません。

□それに、以前の滿鮮旅行はその實、旅行とは言ふものの、主として傳道本意の旅行であつたのと、私の心があまりに若かつた爲めに、丸で彼地の視察を怠つたのであ

りましたが、今度の旅行は私にとつては、永年の宿望であり、それに今回は一切をあけて、彼の地の視察が中心でありました爲めに、私の心はそれこそあくほどに、彼の地の事狀に吸い込まれたかの感があります。

□でも、今日の私にはそれも過去となりました。さうして、今の私にはそれよりも尙、支那について知りたいことの多くを増し、今一度支那の内部の奥深くにも入りたいと云ふ心が非常に強く湧いて居ります。だから今度の旅行は支那の事狀を知つたと云ふよりも、更らに一層に支那の事狀を深く知りたい、味いたいと云ふやうになつたのだと云つても過言ではありません。

□而もそれにもかゝらず、私の今日は仲々にそれを許すべき時間もなく、又費用もないのです。否それどころか、今日の我國の國狀を思ふとき私の今日、慈光宣傳に全身を献けても尙足りない秋であつて、支那の事情など録々語る氣にさへなれない感じがします。

□國民よ、目醒めよと私は天下に呼號して止まないものが私の心の奥底にひらめいてゐるのを私は感じてなりません。此の意味に於て、私の支那の見學は甚だ單日月ではあつたけれども、到底文筆のよくするこのできない多くの獲物を私には得たる感じがします。

□此の意味に於て、私は此の度旅行談を本誌に發表して

いさゝか私の所見を道友の諸彦にわかちたいと思ふのであります。

## 二、出發の準備

□私の話は少々大げさに聞えるかも知れません。乍然之は永年の間、私の願つて居つたことですから、そのへんのところは御許し下さい。

□それについて、私の旅行には四つの願ひがあります。其の一は支那、二は印度、三は世界、四は内地の各町村であります。何の爲めかと云ふならば人類の文化の爲めに、如來の慈光を宣傳すべく、私の修養を積みたいからです。

□然しその中でも支那と印度は私の目下の望みでありました。それには色々の理由もあります、けれども今はそれらの理由を述べるところを差控えます。たゞかうした意味に於て、私が永らく支那の視察を欲すべく、色々と支那の事情を研究してゐたことを御承知願へばそれでよいのです。

□けれども、私の實際はそれではいつ支那へ行くかと云はるればそれは全く未定でありました。たゞ一つ昨年の秋、南支用遊園の募集廣告を見て、此の時と思つたのですが、あいにく私の傳道日定が大垣の別時で先約にな

つてゐましたので又の期會を待つより外に仕様がありませんでした。

□然に今年六月の初め、ふと新聞で日華遊周圍再舉のことを聞ききました。丁度八月の三日から二十四日までと云ふのです。暑い眞夏のことではあるが、此の時をばづしては私の支那行きは又いつになるか判らぬと思つたので、たとい一人ででも自ら決心するところがありませんでした。

□けれども、若し一人でも我が道友の中に連れがあればと思ふので、二三心ある人々に誘いの言葉をかけたのであります。中にも越後の岩下祥兒氏にはかねて、支那行きや、印度行きのこととも御話したことがありますので、右の次第を通じたのでした。

□その間、名古屋や大阪に於て、二三語つたが、とに角、異境の旅ではあり、盛夏の最中、それに支那排日の事などまで新聞にやかましい折柄とて、仲々に賛成を得ることができませんでした。

□そこには此の不景氣に費用の關係もありませうか、費用に關係のない人は命に關係が多いのでした。暑い爲めに病氣はせぬか。支那は不潔の國である、そして見ればきつと食物なども悪からう。蠅が多いとのことだが、傳染病なども心配である。それに支那の排日はともすれば

命にもかゝるることである。永らくの航海船よひなども心配でならぬ。言葉は通せず、案内は判らず、それに非常に盜坊なども多いと云ふでないか。かうしたことが私共の旅をどれほど妨げたか知れませんでした。

□乍然、私としてはそれも一つの妨げではありましたが、それよりも更に一つの問題は子供の爲めの夏休みが私の旅行の爲めに○になることでした。けれども私の妻はかねてからの私の願を知つてくれてゐた爲めに、それらを捨て、今度の旅行を勧めてくれました。

□愈々行くと決まれば萬事は易々たるものとなりまして、或は何事もさうかも知れませんが、あらゆる準備もその爲めにすらすらと片づきました。

### 三、道友の連れ

□道友の中で一番に賛成して頂いたのは名古屋の伊藤留吉氏でありました。「他人は行かぬとしてもあなたが行くなら私も行く」と、そこで二人は少くとも行くことに決つたのでした。さうした間に越後からは岩下氏の賛成の手紙がまゐり、大阪では己に新飼爲義氏の申込み濟みでゐられることが知れ、場合によつては渡部善兵衛氏、尾上銀子氏御一家の参加もあらうと云ふ勢いになりました。

□私は各地傳道の爲め六、七月と寸暇なき爲め、何の用

意もできず、一切を尾上氏に頼んで唐澤の三昧會にまゐりましたが、そこでまだ、神谷善之進氏と谷口年泰氏とが加はられることになつたのです。

□道友七人、尾上氏は不幸にして其の期を得ることができせんでしたが以上の七人が道友として南支の旅行に立つと云ふことが出来たのは何よりの喜びでした。

### 四、周遊の行程

□周遊の行程は八月三日正午神戸を起航し、門司を通じて、基隆に上陸し、汽車で臺北、臺南、高雄を經、再び

## 桑原省三氏を吊ふ

私共が長い間、父の如く兄の如く御慕ひして居た桑原省三氏には七月八日七十二歳で遂に長逝されました。顧みれば私共を眞實の道に奮立たせて下さつたのは一に桑原氏の御力です。今日の大垣光明眞生會をして我が大垣に於ける文化の源泉として力強い存在を示すに至つたのも桑原氏の大きな人格の力による處が多いためです。この桑原氏を上に乗じて、我々は眞生運動の先陣となり大いに中京の野に活躍を期せる時、氏を失つた事は誠に残念であります。天壽を如何にせん。私共は、

船で香港に向い、廣東を見、更に上海に出で、蘇州、杭州を視察し、南京を見て青島に立寄り、二十四日午前七時神戸に歸港すると云ふのがその豫定でした。

□一行二百二十四名、船員接客士官十名 大阪商船、ジヤパン・ツーリスト・ビュローの役員各三人を併せて、二百二十四名、その他船員の一切を集むれば二百五十六名の一行でした。募集人員の二百九十名に對し應募人員の二百二十四名は此の不景氣の際決して不成績とは云はれないと思ひます。(一九三二、九、二) (以下次號へ)

### 大垣光明眞生會

桑原氏の片腕となりて眞生運動に御努力下さつた桑原夫人よし子氏の一層の御指導を御願ひし、桑原氏の御遺志を繼いで、如來大悲のもとに益々眞生の爲めに盡したいと存じます。

桑原氏は官途を退かれてからは爲す事もなく暮して居られました。夫人よし子氏は以前より熱心な佛教信者でありまして、一度土屋觀道先生の説法を聞かれて、大いに其の主張に共鳴せられ、是非夫君を眞生の人たらし



# 道友に告ぐ

## 土屋 觀道

□豫期した三年も過ぎて見れば夢のやうです。私の三年間傳道を中止して勉學と著述とにつくさうとした決心は昨日のやうです。其の結果は豫想の萬一にも當りませんでした。が私には人生の一轉期とさへ思はれて居ります。□勉學の大半は主として現代に生きる人生の大道であつたのです。人類の文化史上から深く考へて見ると云ふのが私の念願でした。

□三ヶ年の豫定が後の二ヶ年は半以上を傳道に出ねばならなかつたのでした。がそれでも私の心には限りない喜びと感謝で初心を貫くことができました。

□今年一ハイはその帳尻をまとめなければなりません。従つて活動も充分出来ませんが來春からは今までの方針を一變して、傳道本位となります。各地の道友もそのつもりで是非御助力を願ひます。

□從來の人達は自分一個の安心立命が眞の宗教であると思ふ人が多かつた。乍然眞の宗教は決して自分一人の信仰や生活で止まるものではありません。自分が宇宙の生命に歸一して、此の世及後の世宇宙と共に一切に生き

るのが宗教であります。従つて宗教と人生とは不二であります。

□此の意味に於て私共が各自相寄り相扶けて如來に目醒め、自他協力して人類の文化に全力を盡すといふことは、此の際、特に注意すべきことであります。今年も亦秋になりました。秋は働くにも、遊ぶにも實に此の上もないよい時期です。どうか此の好斯を逸せず互に扶けて、精み進んで行きませう。(一九三一、九、六)

### 唐澤別時念佛三昧會名簿

七月の唐澤便り昭和六年七月廿三日開白 一週間  
 (東京市) 土屋觀道、小要利吉、同のぶ、神谷善之進、小野勇、谷口春郷、宮下くら、土屋美智子、同良子、山森關子、片岡憲三  
 (大阪府市) 菅尾龜次郎、同富美子、瓶子美男、曾我尾昌治、岩坂正一 (愛知縣、名古屋市) 波部善兵衛、同みさを、同英夫、伊藤留吉、尾上銀子、宮崎一男、中川五十子、伊藤吉三郎、淺野孝眼、眞下あき、黒宮平八、中野善英、内田千代子、同仙之助、淺野一子、同よし子 (岐阜縣) 淺野寅次郎、和田清兵衛、古賀清一、同昇、飯沼徹、竹村縫子、長源寺、後藤つる、太田みつる、山本きぬゑ、栗野準一、北村しげ、小島松太郎 (新潟縣) 原哲郎、阿部雅一、小山市郎、市川カシ、(兵庫縣) 粟井幸子、松井戒順、中野靜子 (静岡市) 關時子 (神奈川縣) 長島岩吉 (三重縣) 佐々木岸雄、同藤綱、谷口年泰 (長野縣) 田中行雄、小尾英一、山田たけ、同みや、安藤百重、小口よし、上條次郎、稻村久子、藤森善左衛門、宮坂睦子、河西秀子、同よし子、宮坂はつる、佐藤邦俊 (速記擔任) 名古屋市) 丹羽銚市、毛利義勝

## 吾朋便り

□越後 原吉郎様。

拜啓 昨日は空然拜禮種々御厄介に相成り難有御禮申上候、御上人様も昨日は既に御歸京被遊候事と奉遙察候種々珍らしき御土産話に御一同様御歡びの事と存上候。

□愛知縣 中野善英様

皆が心を揃へてお祈りしてゐます。その祈りの力からでも御旅行中の皆さんが安全である事を信じます。待つてゐます。元氣で大きくなつて御歸り下さいませ。何の御土産より、皆さんが太い肚になつて、少くとも東洋兒になつて歸つて来て頂きますやう、東京人間やら、大阪人間——日本人間でなく、東洋人間、亞細亞人間になつて歸つて来て頂きたい。そしてその氣分と底力で私達を引立て、下さいますやう念じます。

小さい東洋氣分の中から世界氣分を惹き出し、地球氣分、宇宙氣分を存分嗅ぎ出して、今後勇躍の基礎を造つて頂きた

と存じます。内地でも土用らしくなってきました。御安泰のこと。

□滋賀縣 福永勇賢様

獨りぼつちで極めて單純な生活をし續けてゐた私は、この春に結婚してから至つて製雜な生活をして居ります。二人行脚をしてゆく道は懐かしいのですが、どうかしてその打開につかめたいとおもつてゐるのです。どこまでもこの旅人をしてあやまちの少ないように導いて下さい。

□柏崎町 小山一郎様

先般唐澤山御別時に参加させて頂き心から喜びに浸つて居るものであります。ミムネを己が心として承知して居り乍ら、日々生活がその通りにゆかぬことを悔いて居たものであります。こんごそは一つ宛でもこれが日常生活の上に實際として體驗させて頂きやうです。どうぞ念佛の浅い愚者に今後とも御導き下さる様、御願ひ申上ます。

□岐阜市 松浦重三様

今度の南支御見學も悉く御歸京遊され候趣き御報告を頂き恐縮の至りに存じ

ます。次に長沼様新店も最近落成して見事な講堂となりました。講堂のみに約四萬圓を要せし由、館名は光道館と名づけられました。かれて御名命下された誠も發育極めて良好にて九月十七日を以て誕生ですが二三間歩行政致すやうになりました。乍他事御喜び下さい。

□高須町 圓心寺様

酷暑の折柄、御佛の御光の下に遠く南支御視察に大任を預ひ、幸にして無事御歸國被遊、御両親への御墓前御報告もすませられ候由、御報知に任り、實は如何被遊しやと御察したし居候折柄さて、特に嬉しく感じ入り候。嗚かしまだの御功果を收めての御歸國と御喜び申候、尙今春行基寺での御講録も先日の半分を仕上仕り候。敬具

□浦賀町 石井庄太郎様

酷暑中の南支御旅行はさぞかし御難儀の御事と拜察して居りました。乍然無事御歸京の由承り安堵した次第であります。御來浦の御書面に接しましてから、今日は今日と御出のここのみ御待ち申して居りました。恰度二十五日は當地の例

會で道友の集りも私宅でありましたからその語で大もてました。日がないと云ふので御出見合せもなつた由御報に接して誠に一同羨望いたしました。何れ後日の御出でを御待ち申上ます。

○岐阜縣 行基寺様

御ハガキ洗手奉拜見候、兼て御旅行中南支御見學、無事終了御歸國の旨御快報に預り恐入り候。實は御出發の際崇徳寺様より承り御見送りも不致、失禮仕候。來る二十日二十一日は名古屋へ御來候の由今より楽しみ待入候、是非出名拜謁仕候。何分長々御不在の爲め興味始め御愛子様御喜びの事々御察申上候 草々。

○東京 土屋觀道

殘暑の候皆様には其の後御障りもあらせませんか誌上を通して遙に御安否のほどを御伺ひ申上ます。次に私共一家には無事幸にも慈光裡にありますから乍他事

誌代拂込並寄贈者御芳名

○壹圓宛 浦賀上阪伊之助様、三次六兵衛様、廣島淺野戒全様、山口河本つね様、角部百太郎様、福岡林三郎、榎鹿兒島孝元佐吉様、奈良松濤心隨様、實樹感學様、静岡吉村操様、東京山田八十様、小野勇様、岡崎市外大場藤太郎様○壹圓參拾錢 東京水野重造様○壹圓五十錢 愛知妙福寺様 (以下次號)

御休神のほど願上ます。尙私の支那行きについては各地の道友より一方ならぬ御厚意に任り、一方ならぬ配慮を頂きまして、道友のとなれば御芳志のほど深く拜謝いたして居ります。幸に如來の御加護と皆様の御配慮により、思つた以上の喜びと健康の中に一同歸國いたしましたから之また御放念のほど御願ひ申上ます。彼地視察のあらましは何れ誌上に發表いたすことになりましたから何卒御一讀のほどを御願申上ます。尙不在中各地道友からの御見舞狀など一々御あいさついたす可きところ、歸國早々のことにて之にて失禮のほど御許し願上ます。(九月三日)

八月號休刊

價定誌本  
 一 部 金 十 錢 郵 稅 共  
 半 年 金 六 十 錢 同  
 一 ヶ 年 金 一 圓 同

注 意 の 文 法  
 〓 譯讀希望者は代金を添へて御申込下さい。  
 〓 誌代は總て前金御拂込の事  
 〓 送金は振替によるのが便利  
 〓 です。

昭和六年九月十日印刷納本  
 昭和六年九月十二日發行  
 東京市芝區芝公園十四號地九番  
 發行兼 編輯人 土 屋 觀 道  
 東京市外濠谷町中通二ノ四二  
 印刷人 副 島 愼 夫  
 東京市外濠谷町中通二ノ四二  
 印刷所 丹 丘 舍 印 刷 所  
 電話 青 山 七 五 一 番  
 東京市芝區芝公園十四號地九番  
 發行所 眞 生 社  
 振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日) 昭和六年九月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十卷第八號  
 (第三種郵便物認可) 昭和六年九月十二日發行

(大正十四年八月十三日) 第三種郵便物認可